「パンセクシュアル」のカテゴリー分析
――当事者のカテゴリー使用実践に着目して――
Category analysis of "Pansexual": Focusing on the category use practices of individuals

亀津　万里
KAMETSU Mari

In recent years, the category of pansexuality has become self-identified by individuals as a non-dualistic form of sexual and romantic orientation. However, pansexuality is not well-known or widely understood in Japanese society. This paper examines how the category of sexual minority, pansexuality, is used by individuals. The analysis highlights the difficulty of defining and understanding pansexuality and emphasizes the importance of considering the experiences and meanings attributed to pansexuality by individuals. The purpose of the study is to explore how pansexual individuals understand and explain their sexuality, especially in societies where binary gender norms persist. Delving into the categorization of pansexuality through the narratives of self-identified people may provide new perspectives on existing concepts related to sex and gender.

キーワード：パンセクシュアル (Pansexual)、カテゴリー (Category)、セクシュアリティ (Sexuality)、性的マイノリティ (Sexual minority)、カテゴリー使用実践 (Category Use Practices)

１．はじめに

近年、性的マイノリティやLGBTQ+といった言葉の注目度が日本社会でも高まっており、こうした概念の広まりや多様化は、自己のセクシュアリティを表現できる可能性を拡充している。こうした流れを受け、学術領域においても、性的マイノリティに着目した研究は増加傾向にあると言えよう。当事者が主体となり、いかにして個人が自分自身を同性愛者や異性愛者、あるいはそのほかのセクシュアリティであると認知できるのかといった疑問を中心に、様々な方向から研究が行われている。しかし、国内外問わず、先行研究の多くはゲイやレズビアンといった、1つの性に惹かれる「単性愛（monosexuality）」のカテゴリーに関心を寄せてきた（Galupo et al. 2015; Hayfield 2020）。

そこで、本稿ではパンセクシュアル（pansexual）というカテゴリーを取り上げたい。なぜなら、パンセクシュアルは二元的な性別規範や単性愛に当てはまらないカテゴリーとして捉えることができるためである。しかし、比較的新しいカテゴリーであるパンセクシュアルは、それゆえ、単性愛を自明とする社会においては、その位置付けについて議論の余地が残されてい

る[1]。とりわけ、国外ではパンセクシュアルというアイデンティティの概念化を当事者の語りから分析する研究が増えつつあるが（e.g., Belous and Bauman 2017；Elizabeth 2013）、日本では同様の試みが待たれている状況である。

そこで本研究では、パンセクシュアルというカテゴリーに注目し、当事者による本カテゴリーの認識と使用の実践を分析する。特に、当事者がパンセクシュアルをどのように理解し、単性愛とは異なる性愛を解釈しているのかについて、当事者の語りから明らかにしたい。西阪仰（1998）は、カテゴリーや概念が状況依存的であると述べ、それらを用いることでひとつの社会的現実が説明可能になると指摘する。当事者によるパンセクシュアルの使用実践を解き明かしていくことで、非当事者を含め、現在の日本社会に性やジェンダーにつきまとう既存の概念や差異に新たな視座を提供できるかもしれない。

2．「パンセクシュアリティ」を検討する

(1)アイデンティティ・カテゴリーとしての「パンセクシュアル」

パンセクシュアルという言葉は、「すべて」を意味するギリシア語の接頭語「パン」に由来しており（Peterson 2013）、すべての性別、または性別に関係なく、性的ないし恋愛的に惹かれることと理解されている（Galupo et al. 2017；Gonel 2013）。また、性表現（男らしさ、女らしさなど）、性自認、生物学的性に関係なく、人に性的または恋愛的魅力を感じることを示すカテゴリーとして概念化されることが多い（Rice 2015）。パンセクシュアルというカテゴリーは、また二元論的な性別規範を解体する意味合いも内包している。A. H. Gonel（2013）によれば、当事者は自身のアイデンティティを既存のカテゴリーによって説明することに疑念を抱き、性別に依らない多様な惹かれを説明するためにパンセクシュアルを自認している。ここでは、パンセクシュアルは当事者の性自認を流動的に解釈することを許容するカテゴリーとして機能していることが示唆される（Ibid.：75）。

当事者は共通する理解の枠組みのなかでパンセクシュアルを自認するのではなく、むしろその過程は様々であることが、これまでの研究で指摘されている（Lapointe 2017；Hayfield and Křížová 2021）。性的あるいは恋愛的な思考のあり方が広範囲かつ流動性を伴うものである以上、パンセクシュアルを容易に定義することはできない（Belous and Bauman 2017）。

日本においてパンセクシュアルが認知されるようになったのは、2010年前後だと推測される[2]。これを裏付ける明確な資料はないものの、ある当事者は、①SNSの普及によって個人が情報を容易に発信できるようになったことに加え、②日本において「男女」という性別二元論から外れるような性自認の理解（例えばトランスなど）が広まったことが要因だと指摘している（コミュニティ代表[3]2023年7月3日聞き取り）。②については、他の当事者へのインタビューにおいても多々言及されていた[4]。

もちろん、2000年代以前にもバイセクシュアルに当てはまらない性自認や、「性別は気にしない」という性愛のあり方は存在していたが（性意識調査グループ 1998：19）、そうしたセクシュアリティを説明しうるカテゴリーが個人のなかで不在であり、かつ周知されていなかったため、バイセクシュアル・カテゴリーがより用いられていたと考えられる。パンセクシュアルという用語が文献上で用いられたのは、2006年に日本語訳が出版された、J. Eadie編著『セクシュアリティ基本用語事典』の記述が確認できるかぎりでは、国内で最初のものである[5]。近年で

は、日本でも徐々にパンセクシュアルの認知が拡がっており、自身が当事者でもある臼井一美（2022: 108）は、パンセクシュアルを「すべての性別が恋愛対象になり、好きになる人の性別という概念を重要視しない人」と説明している。

しかし、パンセクシュアルがどのように当事者によって用いられているのか、どのように広まったのかは不確定である。このような現状は、当事者が既存のカテゴリーでは説明できなかった経験や考えを表現するための手段として「パンセクシュアル」を自認するようになるという過程を示唆しているようにみえる。言い換えれば、バイセクシュアルといった既存カテゴリーでは語りきれないセクシュアリティの多元性のあらわれである。パンセクシュアルという新たなカテゴリーへの自己の位置付けを明らかにするには、当事者の「語り得なさ」、すなわち、既存のカテゴリーによって封じ込められてきたかれらのセクシュアリティに耳を傾ける必要がある。

（2）カテゴリー使用実践を記述するために

H. Garfinkelの「アグネス」論文では、現代であれば「性同一性障害」の当事者としても語ることができるアグネスが、性別を日常的な実践を通して達成する様相を描いている（Garfinkel 1967=1987）。Garfinkelはアグネスを「日常的な方法論の実践者（a practical methodologist）」と呼んでおり（Ibid.: 180）、本論文は、他者がどのように個人を「ある種」の人であると理解しうるのか記述することを主題としている。アグネスは他者との相互行為において、女性として振舞うことで他者によって女性と認識され、自己も女性であると認識する。パンセクシュアル当事者は、「性別を気にしない」という語りをとおして、自身がパンセクシュアルであることを提示し、同時に自身がパンセクシュアルであることを認識してもいる。こうした「女性」や「パンセクシュアル」というカテゴリーの使用は、自身がある種の人「である」ということを成立させるための言語的な実践なのである。

したがって、パンセクシュアルというセクシュアリティを理解するためには、そのカテゴリーの使用に注目する必要がある。ただし、カテゴリーは自己を構築する認識枠組みとして機能するが（片桐 2006: 30）、それは常に再解釈や修正の可能性を内包している。また、杉浦（2002: 79）はアイデンティティを意味づけの実践と捉えるButlerの理論を踏まえ、「同性愛者」という自己がある時点で意味を付与され固定化された存在ではなく、日常的な言語実践の中で繰り返し意味づけられることを指摘する。ここで重要になるのは、私たちが言語実践を通して「である」という自己を逐一構築していることである。本稿で考える「パンセクシュアルである」という現実が構築されるためには、そこに何らかの知識を使用した言語実践が求められる（杉浦 2002: 80）。そのため、パンセクシュアルという「カテゴリーのもとで自己を理解し、そのカテゴリーをどのように用いていくのかという、カテゴリー化の実践」（前田 2009: 50）を捉えるためには、当事者の主観的な経験に注目する必要がある。

では、パンセクシュアル当事者は他のセクシュアリティと異なるカテゴリーをどのように理解し、そこに自己を位置付けているのか。本稿では、1名の当事者の語りを取り上げ、そのカテゴリーの使用実践に注目する。

また、本稿ではカテゴリーの使用実践を記述するため、H. Sacksの「カテゴリー化」の議論を参照したい。Sacksによれば、私たちは、自己や他者の活動を理解するための知識をもとに、カテゴリーを認識する（1972: 335-8）。ここで認識されるカテゴリーについて、本稿でもパン

セクシュアルを挙げて注目していくが、Sacksの「ホットロッダー」の論考は、今回の考察にひとつの手がかりを与えてくれる（Sacks 1979=1987）。Sacksは改造車に乗る若者たちを意味する「ホットロッダー」を革命的なカテゴリーと表現した。なぜこのカテゴリーが革命的なのであろうか。それは、このカテゴリーによって自らを表現することが大人への抵抗となるからである（鶴田2020: 128）。通常、カテゴリーをある集団に付与する権利は、当該集団以外の集団が所有している。Sacksはその例として、「ティーンエージャー」を挙げる。「ティーンエージャー」というカテゴリーは大人が付与するものであり、それは支配的な人々の認識を反映する。つまり、ティーンエージャーは大人によって付与され管理されるものである。そのため、支配的なカテゴリーから抜け出し、もしくはカテゴリー内部の知識を変革させるには、主体的なカテゴリー構築が必要となる。この点、「ホットロッダー」は、メンバーによってカテゴリーをめぐる知識体系を修正することを通し、カテゴリー適用を自分たちで行うのである(6)。このような主体的なカテゴリーの適用と使用は、支配的な社会認識に対する新たな認識の可能性を提供する（小宮 2021: 179）。使用実践の分析にはカテゴリーの適用、使われ方、活動を理解するための知識の解明が不可欠であるが（Sacks 1979=1987：38）、主体的なカテゴリー構築が、規範や秩序に対する抵抗や変革の意味を持つのであれば、カテゴリーの分析を通して、どのような認識が当事者のあいだで見られるのかは注目に値する。本稿ではSacksの議論を踏まえて、パンセクシュアル当事者の語りにみられる自己の経験とその解釈、カテゴリーへの自己の位置付け、そしてカテゴリーの使用を通じた規範への問いかけに焦点を当てていく。

３．Cさんのカテゴリー使用実践

（1）調査概要

本稿では、パンセクシュアルを自認するCさんのカテゴリー使用実践を取り上げる。筆者は、Cさんと当事者コミュニティのSNSを通じて知り合い、承諾を得てインタビューを2回行った（2022年8月および2023年8月に実施）。また、調査ではCさんのライフストーリーおよびパンセクシュアルというカテゴリーを分析するため、非構造化形式のインタビューを各2時間程度行った。先行研究では、本カテゴリーが自認する個人に、性別二元論からの解放や、自己や他者の性自認をより規定しないものとして捉えることを可能にすることが指摘されていた（e.g., Belous and Bauman 2017）。そうしたなかで、ノンバイナリーという性自認を持つCさんの語りに注目することで、性自認とセクシュアリティという両軸から「パンセクシュアル」というカテゴリーをより重層的に捉えることができるだろう。なお、本稿の分析で取り上げる語りは、Cさんが許可したものを掲載している。

Cさんは30代で、性自認はノンバイナリーを、また、セクシュアリティはパンセクシュアルを自認している(7)。大学時代に性別規範などに違和感を抱いたことから、ジェンダーやフェミニズムへの学びを深めていった。それ以前にはシス女性かつ異性愛者として生きていたが、留学中に性自認のあり方を捉え直すようになり、現在では自身の性自認を規定しないノンバイナリーを自認している。性自認の捉え直しは、Cさん自身のセクシュアリティとそれをめぐる内省的な思考の言語化を可能にする契機でもあった。

(2)「変わり得る」性自認

Cさんが自身の性自認を理解しようとしたうえで、まず先に適用されたのはノンバイナリーというジェンダーカテゴリーであった。その後、Cさんがパンセクシュアルというカテゴリーに自己を位置付けるようになった経緯について、次のように説明している。

[1]

（自身の性自認をノンバイナリーと捉えるようになったことを受け、）そうなるとやっぱり性自認って変わり得るものだと思うし、相手の自認についてもその見た目とかで決めつけちゃいけないなという風に思うし、だからやっぱり、私は自認を男女で分けたくないとか、勝手に決めたくないって意味で、ちょっとバイセクシュアルって使うのは抵抗があって、その中でパンセクシュアルはもうちょっと決めつけないというか、広い定義として使えてることが、パンセクシュアルと名乗っていいのかなと思ったんですよね。それで言うとさっきのパートナーシップ自体をいろいろ考えなおしたっていうのもあって、別にじゃあ男性じゃなくて良くないとか、なんなら性的関係じゃなくて良いと思ったし、なんかその意味でパンセクシュアルって名乗ろうと思ったんですね。

（2022年8月聞き取り、下線部や括弧内の補足は筆者による）

Cさんにとって、自身の性自認を捉え直すという経験は、性自認は「変わり得るもの」と考えるきっかけになった。パンセクシュアル当事者が多様な性自認のあり方や、性自認が変化する可能性をより認識していることは先行研究でも指摘されていたが（Belous and Bauman 2017; Hayfield and Křížová 2021）、これはCさんにおいても見られるものであった。自己や他者の性自認は「変わり得るもの」と捉えたときに、一般的に両性愛と理解され、Cさんのなかでも男性や女性と相手を捉えてしまうセクシュアリティである、バイセクシュアル・カテゴリーは、その適用に「抵抗」感のあるものとして立ちあらわれたのである。そのため、相手の自認を男女で分けることや、見た目などで決めつけてしまうことを避けたいという思いから、パンセクシュアルを名乗るようになった。

さらに、Cさんの捉え直しの実践は、他者との関係性自体にも及んでいる。Cさんにとって、パートナーシップを「男性」であることや「性的関係」に基づいて結ぶことは重要ではない。それは、性別二元論やその他のジェンダー観に基づく社会規範における性愛の実践の解体としても読み取ることができる。こうしてCさんは、性的な関係や恋愛的な関係を一枚岩ではないものと捉えるようになり、自己に広義の意味でのパンセクシュアルを当てはめるようになっている(8)。上記のインタビューから1年後に聞き取りを行った際も、Cさんはパンセクシュアルの自認について同じように述べていた。

[2]

性自認を、シスジェンダーの女性と言い難いなと思った時に、じゃあ、別に男性になりたいわけでもないし、二元論として捉えられないなと思ったんですよね。ノンバイナリーとかXジェンダーっていうのがしっくりきた中で、自分のジェンダーも、男女どちらともちょっと言い難いし、相手のジェンダーも、あんまり決めつけるのは好きじゃないなと思

う から。同性愛なのか異性愛なのかとか、両性愛として見てるのかな。とか、正直決めかねるところがあるし、決めてしまうことにやっぱり抵抗感もあったから、ある種、全性愛って言葉であれば、すごく傘が広いじゃないですか。

（2023年8月聞き取り、下線部は筆者による）

「シスジェンダーの女性」でも「男性」でもない自身の性自認を性別二元論の枠組みで理解することは容易ではない。そうして、ノンバイナリーやXジェンダーが自己をより説明できるとCさんは捉えている。どのようなセクシュアリティであるかを決めかねることや、セクシュアリティを規定してしまうことで、相手の性自認も規定してしまう可能性を踏まえ、自身のセクシュアリティを決めることに抵抗感を抱いている。Cさんのなかでは、両性愛（バイセクシュアル）だけでなく、同性愛であれ、異性愛であれ、相手の性自認を決めつけてしまう可能性を持つものとして捉えられているといえる。そのためCさんにとって、相手の性自認を重視せず、より「傘が広い」と感じる全性愛、つまりはパンセクシュアルが自己カテゴリー化されている。

上記のCさんの語りは、性的ないし恋愛的な関係を他者と構築する実践面で、性自認がどのように作用する／しないかを分析するための重要な視点を与えている。昨今の性的マイノリティにかかわる用語の普及に伴い、性自認の多様性は社会に広く認識されはじめているが、他方で親密な関係を築く際に相手の性自認をどう捉えるかという点は見落とされているといえる。ジェンダーには“らしさ”が付随する。Cさんは、“らしさ”のような視覚情報としての性別を思考に入れないということは不可能だとしたうえで、そうした情報だけでは相手の性自認を判断することはできないと指摘する。表現する性や自認する性、そして身体的な性が常に一致するわけではなく、異なる可能性もあるという前提を踏まえ、パンセクシュアルが名乗られる理由について、Cさんは次のように語っている。

[3]

Cさん：あと、やっぱり女性的な面に惹かれるとか、男性的な面に惹かれるところがあんまりこう、ポイントとしてないのかもしれないですね、そこっていうよりはやっぱり、なんだろうな、こう共感、その人のあり方、生き方自体にすごく憧れるとかいうことの方が、うん。

（2022年8月聞き取り）

Cさんは自己の実践のなかで、性的惹かれと恋愛的惹かれを分けて捉えているが、上記の語りは、パンセクシュアルというカテゴリーのもとで自身を捉えたときに、どのような人に対して情緒的・精神的に惹かれる可能性があるのかについて答えるものである。Cさんにとって、ジェンダーに付随する“らしさ”は他者に惹かれるポイントではなく、それよりも、「その人のあり方」が重要視されている。

Cさんは、過去にレズビアン当事者の会に参加した際、パンセクシュアルを自認していることを他の参加者に公表すると、「誰でもいいんですね」という発言を受けたという。その経験から、Cさんは、全性愛という言葉は余計に「誰でもいい」ことや「奔放さ」と結びつきやすい可能性について示唆していた。しかし、多くの人が好みやタイプを持つように、パンセクシュアル当事者も親密な関係を持つ時には「誰でもいい」わけではない。Cさんにとって、好みやタ

イプでは「あり方」や「生き方」といった人間性が重視され、ジェンダーは「こだわり」を持つ要素ではないのである。

(3) カテゴリー使用による自己と社会への問いかけ

ここまで、Cさんがどのような背景から、パンセクシュアルに自己を位置付け、カテゴリー化を通じて性自認を再解釈してきたかをみてきた。本節では、Cさんにとって、パンセクシュアルというカテゴリーを使用することでどのような語りが可能になったのか、そして、社会の規範にいかなる問いかけを可能にしているのかに焦点を当てたい。

これを明らかにするため、Cさんのパンセクシュアルに対する理解と他者への説明について、改めて確認したい。以下は、パンセクシュアルをどのように他者に説明するのかという質問に対するCさんの2つの回答である。

[4]

特段、性別で見て好きにならないというか、人を性別で限定しないって言ってますね。なんか、誰でもいいんですかとは誤解されるんで、そうじゃなくて別にそこの相手の性自認がどうかとか気にしないし、ある種、自分自身も女性として見られること自体はやっぱ抵抗があるので、そこのない関係づくりをしていきたいっていう思いはやっぱりあるんですよね。

（2022年8月聞き取り、下線部は筆者による）

[5]

今は別に中性的な格好をしようとか思ってないけど、でも中身はノンバイナリーという人間だし。けど、やっぱり見た目で社会的に女性と振り分けられてしまう中で生きてて、別にもうそれはいちいちそれで傷ついたりはしないんですけど、ただ、やっぱり自分のその居心地の悪さってのがあるから、人の自認も見た目で決めつけないようにしようという風には思っていて。そうすると、やっぱり自分の自認も男女で分けられないし、相手の自認も男女で分けられないなら、やっぱそれは異性愛なのか同性愛なのか、まあまあ、両性愛なのかっていうのは決めかねるって意味で、自分の自認だけじゃなく、相手の自認もなんか ふわふわさせておきたいっていう意味もあって、パンですね。

（2023年8月聞き取り、下線部は筆者による）

他者にパンセクシュアルを説明するとき、Cさんは「相手の性自認」を重要な点として挙げている。Cさんは、断片[4]、断片[5]において、「見た目」によって女性と振り分けられてしまうことに対して、「抵抗」感や「居心地の悪さ」を抱いている。だからこそ、断片[5]のなかで、「ふわふわさせておきたい」と表現しているように、他者を性別二元論に位置づけてしまうことを避けるために、相手の性自認も決めつけないという姿勢から、パンセクシュアルであることを説明している。

先に述べたようにSacksは、主体的なカテゴリー化とその使用が既存の社会規範や秩序に対する抵抗や変革の意味を内在すると指摘している。それでは、Cさんはパンセクシュアルであることを通じて、他者との関係やジェンダー規範に何を問いかけているのだろうか。Cさん

はこの点に関して、性愛における“規範”について触れている。たとえば他者との親密な関係を第三者に説明することの難しさを語るなかで、Cさんは次のように述べている。

[6]

私の個人の例で言えば、やっぱり、なんか、規範的な性愛っていうところにとらわれなくなったというか。ある種それは、異性ってか男性と、告白して、お付き合いをして、セックスをして、みたいなところがある。それを、なんか儀式的に踏んでたんですけど、通過儀礼みたいに、それこそ大学生の頃とか、踏んでたんだけど、まあ、1回やったら、こんなもんかって感じもしたし、別にしなくていいと思えたら、あんまり、性的なことがない関係性だっていいなと思えたし、恋愛がない関係性の方がいいなと、今は思うし。なんか、そういう基本的なカップルみたいな形とかに、固執しなくなったのが、割と、ジェンダー問わずっていう形ですね。

（2023年8月聞き取り、下線部は筆者による）

上記では、Cさんがノンバイナリーやパンセクシュアルを自己カテゴリー化する中で、多様な考えに触れ、自身の性愛における思考がより開かれたものになったことが示唆されている。つまり、Cさんは思考実践においてより柔軟さを手に入れたといえる。上記では、Cさんがノンバイナリーやパンセクシュアルを自己カテゴリー化する中で「規範的な性愛」に疑念を抱き、規範に縛られない性愛のあり方を模索しようとする思考があったことを示している。Cさんにとって恋愛や性的な関係は「通過儀礼みたい」なものであり、付き合うことで相手や自身の行動が規制されてしまうことや、別れる際には関係そのものがなくなってしまうことに「合理的な理由」を見つけることはできなかった。「カップルみたいな形」に固執しないという思いから、「性的なことがない関係性」、「恋愛がない関係性」を意識的に望むようになったという。

さらに、「恋愛の規範みたいなところも、さっきの、じゃあ、自分が今まで違和感を感じてきた、女性ジェンダーとすごく繋がっちゃうってところがある」（2023年8月聞き取り）と話すように、相手や自身の行動を規制する一般的な恋愛規範について、ジェンダー規範や女性役割と結びつくものと捉えている。そうした恋愛規範は、恋愛関係において自身が「女性」らしさを演じると同時に、相手にも役割を果たすことを要求する、ジェンダーに基づいた強制力である。それは到底、情緒的な関係に相手の人間性を重視というCさんの考えと同調するものではない。

Cさんは、自身の性自認が「ふわふわ」した曖昧なものであること、他者との関係においては人間性が重要であることを、パンセクシュアルというカテゴリーを通じて理解している。こうしたカテゴリー使用の実践は、自己への問いかけにとどまらない。「規範的な性愛」に囚われない自己のあり方の模索は、性別二元論と強く結びつく恋愛規範にジェンダーの強制力が働いていることを訴えているといえよう。これは、普遍的な恋愛規範がすべての人に受け入れられるものではなく、それに縛られない関係のあり方を肯定しようとする実践がつくりだされていることを示唆している。

(4) パンセクシュアルはなぜ名乗られるのか

Cさんにとってパンセクシュアルとは、自身の性自認だけでなく、他者の性自認も規定しな

いカテゴリーとして使用されていることが、語りから明らかになった。そして、Cさんの性別二元論や役割規範から脱却したいという思いに整合性のある、性的・恋愛的感情や関係に対する価値観をこの新たなカテゴリーが説明可能にしたのだと言える。しかし、Cさんの語りからは、パンセクシュアルが性的あるいは恋愛関係で自己や他者の性自認を重視していないことのほかにも、カテゴリーに共通する価値観のようなものが当事者間で共有されている可能性も考えられた。それは、バイセクシュアルという既存カテゴリーに対するイメージである。

筆者はインタビュー調査において、協力者に対し、バイセクシュアルとパンセクシュアルにそれぞれ抱くイメージについて聞き取りを行った。両カテゴリーは共に「複数性愛」（plurisexual）のカテゴリーとして海外の研究では並列されることも多い。聞き取りから明らかになったことは、協力者のパンセクシュアル当事者の半数は、以前はバイセクシュアルを自認していたことである。しかし、パンセクシュアルというカテゴリーについての知識を得たことから、パンセクシュアルを自認するようになった。「自己/他者の性自認を規定しない」という要素以外に協力者にとって、どのような可能性がパンセクシュアルというカテゴリーに結び付けられるのだろうか。Cさんとバイセクシュアルとパンセクシュアルのイメージの差異について話し合った際、「区別しない感じは、やっぱり受けるなと思う」や、同性愛や両性愛と「決めてしまうことにやっぱり抵抗感もあった」と語っていた。同時に、パンセクシュアルがバイセクシュアルなどの既存の類似カテゴリーよりも「区別」や規定しないものとして、Cさんにとって理解されていることが読み取れる。バイセクシュアルではなく、パンセクシュアルを選ぶことで、Cさんは自己や相手の性自認を決めつけてしまうこと、そして、決めつけられてしまうことの「抵抗感」から解放されるのである。

４．おわりに

本稿では、パンセクシュアルを当事者がいかに認識し、使用しているのかについて、Cさんの語りから考察を試みた。Cさんにとって、パンセクシュアルは「好意を抱く対象を性別で限定しない」という価値観を説明可能にするカテゴリーとして用いられていた。「相手の性自認を気にしない/決めつけない」といった姿勢は、他の協力者にも共通するものであった(9)。Cさんの場合は、自身の性自認を性別二元論の枠組みで説明できないことをきっかけにパンセクシュアルを認識し、使用していた。これは、パンセクシュアルが性別二元論の言説で自己や他者の性自認を決めつけないカテゴリーとして機能していることを示している。

また、パンセクシュアルが非二元論的な性自認の多様化を認めていることも、当事者によって受容される一因となっている。パンセクシュアルは、Cさんのような価値観や経験を説明可能にし、従来の規範にとらわれない性自認を肯定する。それと同時に、当事者間の共有や省察が既存のセクシュアリティとの差異を可視化させ、パンセクシュアルというカテゴリーの構築を可能にしていることも、Cさんの語りから示唆される。こうしたCさんの姿はまさに「実践者」として捉えることができると言えよう。

海外の文脈では、多くのパンセクシュアル当事者が、カテゴリーを選択した主な理由として性別二元論に対する抵抗を挙げていたことが指摘されている（Belous and Bauman 2017; Elizabeth 2013）。上記で分析したCさんの実践において、Cさんのなかで性別二元論は相対化され、それに結びつく、既存の性自認カテゴリーや恋愛制度は、拒否感が抱かれている。上

記でみたような、自己や他者を性別二元論のなかに位置付けたくないという姿勢はある種の「抵抗」として見ることができるのではないだろうか。

Bacchi（1996）は、「男」や「女」という二分法への依拠が、その他のカテゴリーのアイデンティティを抑圧してしまうと論じている。日本社会では今もなお二分法的なジェンダー規範が支配的であり、規範にあてはまらない性自認は制限されている。そうした中で、トランスなどに始まり、Xジェンダーやノンバイナリー、そしてパンセクシュアルというカテゴリーの顕在化は、二分法規範を乗り越えた、新たな自己の認識の方法を提示する。こうしたカテゴリーを認識し、使用することとは、「男性」や「女性」、それに伴って判断される「見た目」に依る性愛関係に抑圧される個人がいることを可視化し、多様なセクシュアリティの存在を肯定し、そして社会に訴えるための実践である。

註

(1) 単性愛的でないカテゴリーの研究は、国内ではバイセクシュアルに重きが置かれてきたと言える。バイセクシュアル当事者の「両性愛者」という語の位置づけや、その共時的側面に注目した研究（木場 2016, 2019）。また、女性バイセクシュアル当事者の自覚・自認体験に注目した研究や、当事者の持つ心理的葛藤に焦点を当てた研究などがある（金 2021, 2023）

(2) Fさんの「（筆者）：いや、全然全然。パンセクシュアルって日本で出てきたのって、2000 年初期とかですか。Fさん：もっと後ですよね、2010 年代以降ですね」（2023年5月聞き取り）という語りなど。性的マイノリティ当事者のコミュニティに何度も参加しているIさんも「2008年、9年。そのぐらいだと思う。それまではもう全然パンセクシュアルって言葉聞かなかったですね」（2023年6月聞き取り）と、コミュニティにおいてパンセクシュアルという名前をそこまで耳にしなかったことを言及していた。

(3) バイセクシュアルおよびパンセクシュアルなどの当事者コミュニティの代表。メールでの聞き取りを行った（2023年7月聞き取り）。

(4) Fさんの「バイよりもパンとかいうね、相手は別に関係ないんだなと思うようになったのは、やっぱりトランスも出てきて、さらに言葉が出てきて、そこでもう 1 回、自分で反芻してからですよね。で、人間、言葉によって変わるから。（2023年5月聞き取り）」といった語り。Cさんも「昔は、それこそ性自認にそこまでスポットが当たってなかったというか、多分、トランスの人は昔からいたし、その意味で性自認の違和ってところは当然、昔からスポットは当たってたと言えるけど、要は、男女以外の性自認が認識されてなかったし、許されてもいなかったってところかなって」と話していた。

(5) 東京都立図書館のレファレンスを利用した検索の結果、2006年のものが国内で最初にパンセクシュアルについての説明の記載された文献として入手できるものであった。

(6) Sacksはこれを自己執行（self-enforcement）と表現している(1979=1987: 34)。

(7) また、Cさんは恋愛的な感情を他者に抱かない、アロマンティックや、友愛と性愛の差異について疑問を感じていることからクワロマンティックの可能性もあると示唆していた。こうした自認がCさんのパンセクシュアル理解にどのように影響しているかは別稿に譲る。

(8) 広義のパンセクシュアルは、性的指向と恋愛的指向を分けず「性別問わず」性愛感情を抱くことと説明できる。狭義のパンセクシュアルは海外における性的と恋愛的惹かれを分けて捉える流れを受け、性的な惹かれのみを説明するものとして用いられることもある。性的指向は性的に惹かれる対象の性別だけでなく、恋愛的に惹かれる対象の性別も決定すると捉えられる。しかし、多くの人にとっ

て一致している2つの指向は、他の人にとっては一致せず、区別し得るものとして機能することもある。性的マイノリティの研究のなかでは、性的指向と恋愛的指向を区別し、それらをセクシュアリティとして説明する実践も指摘されている（e.g., Galupo et al., 2014）当事者による多様な性愛の解釈については別稿でより詳しく分析する。

(9) 例えばAさんの「相手の性別関係ないなみたいな、人だから好きっていう感覚」という語り（2023年1月 聞き取り）。

参考文献

Bacchi, C. L., *1996, The Politics of Affirmative Action: "Women", Equality and Category Politics,* London: Sage Publications.

Belous, C. K. & M. L. Bauman, 2017, "What's in a Name? Exploring Pansexuality Online," *Journal of Bisexuality,* 17(1): 58-72.

Elizabeth, A. 2013, "Challenging the binary: Sexual identity that is not duality", *Journal of Bisexuality,* 13(3), 329-337.

Eadie, Jo.ed, 2004, "Sexuality : the essential glossary", Arnold（金城克哉訳，2006，『セクシュアリティ基本用語事典』明石書店.）

Garfinkel, H., 1967, "Passing and the Managed Achievement of Sex Status in an 'Intersexed' Person part 1," *Studies in Ethnomethodology,* Prentice Hall, 116-185.（山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳, 1987,「アグネス, 彼女はいかにして女になり続けたか――ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』せりか書房.）

Gonel, A. H., 2013, "Pansexual Identification in Online Communities: Employing a Collaborative Queer Method to Study Pansexuality," *Graduate Journal of Social Science,* 10(1): 36-59.

Hayfield, N., 2020, *Bisexual and Pansexual Identities-Exploring and Challenging Invisibility and Invalidation,* New York: Routledge.

Hayfield, N., & Křížová, K., 2021, "It's Like Bisexuality, but It Isn't: Pansexual and Panromantic People's Understandings of Their Identities and Experiences of Becoming Educated about Gender and Sexuality", *Journal of Bisexuality,* 21:2, 167-193.

片桐雅隆，2006，『認知社会学の構想――カテゴリー・自己・社会』世界思想社.

木場安莉沙，2016，「性的少数者の複合アイデンティティと連帯可能性――ナラティブ分析から見る当事者の語りを中心に」『未来共生学』3: 301-330.

――――，2019，「バイセクシュアル・アイデンティティのナラティブ分析――アイデンティティの共時的構築を中心に」『社会言語科学』22(1):157-171.

金智慧，2021，「女性Bisexual当事者の自覚から自認までの過程に関する質的検討――両性愛傾向への気づきと受け入れ」『日本性科学会雑誌』39(1): 45-58.

金智慧・能智正博，2023，「女性バイセクシュアルを生きる――当事者同士の語り合いの質的検討から」『質的心理学研究』22: 296-313.

小宮友根，2021，「言葉を用いた革命の試み」樫田美雄・小川伸彦編『<当事者宣言>の社会学――言葉とカテゴリー』東信堂，175-195.

Lapointe, A. A., 2017. It's not pans, it's people": Student and teacher perspectives on bisexuality and pansexuality. *Journal of Bisexuality,* 17(1), 88–107.

前田泰樹，2009，「遺伝学的知識と病いの語り――メンバーシップ・カテゴリー化の実践」酒井泰斗・浦

野茂・前田泰樹・中村和生編『概念分析の社会学――社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版，41-61.
西阪仰，1998，「概念分析とエスノメソドロジー」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房，204-223.
Galupo, M. P., Mitchell, R. C., & Davis, K. S., 2015, “Sexual minority self- identification: Multiple identities and complexity”, *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity,* 2, 355-364.
Galupo. M. P., J. L. Ramirez & L. Pulice-Farrow, 2017, ““Regardless of Their Gender”: Descriptions of Sexual Identity among Bisexual, Pansexual, and Queer Identified Individuals,” *Journal of Bisexuality,* 17(1): 108-124.
Morandini, J. S., Blaszczynski, A., & Dar-Nimrod, I., 2017, “Who adopts queer and pansexual sexual identities?”, *Journal of Sex Research,* 54(7), 911-922.
Peterson, E., 2013, “Pansexual: A ‘New’ Sexual Orientation?,” Live Science, (Retrieved September 10, 2023, http://www.livescience.com/41163-pansexual-sexual-orientation-pansexuality.html).
Rice, K., 2015. Pansexuality. In P. Whelehan & A. Bolin (Eds.), The International Encyclopedia of Human Sexuality, 861-1042. Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
Sacks, H., 1972, “On the Analyzability of Stories by Children,” Gumperz, J. J. & D. Hymes eds., *Directions in Sociolinguistics*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 325-345.
――――, 1979, “Hotrodder: A Revolutionary Category,” Psathas, G. ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology,* Irvington Publisher, 7-14.（山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳, 1987,「ホットロッダー――革命的カテゴリー」『エスノメソドロジー――社会学的思考の解体』せりか書房.）
性意識調査グループ編，1998，『 310 人の性意識――異性愛者ではない女たちのアンケート調査』七つ森書館.
杉浦郁子，2000，「『ライフヒストリーを記述する』実践を記述する――『レズビアン』カテゴリーの使用法をめぐって」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房.
――――，2002，「『レズビアン』という自己――語られる差異とポリティクスをめぐって」好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房.
臼井一美，2022，「パンセクシュアルという在り方――『複雑さ』と向き合いながら」平良愛香編『LGBTとキリスト教――20人のストーリー』日本キリスト教団出版局.